

ノアと高次縫製師に
なつてD×D転生

わけがわからないよ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

観察して人をイラつかせるのが好きな男が男の娘になってDxDの世界で大暴れ。戦って遊んで貶めて自由に優雅に遊び倒す。

目次

プロローグ

転生のプロローグ

1

原作前

友達と力の襲来

6

魔剣と初戦闘

11

プロローグ

転生のプロローグ

プロローグ

「あれ〜？ 白〜い♪」

気がついたら一面白い部屋、いや部屋なのかは知らないけどね。ただいつものようにニコニコ満面の笑みを浮かべている。

「おぬし、ちと落ち着きすぎじゃあないかの？」

「あせつてもいいまないよ〜」

突然の質問にも動じず振り返ってみるとそこには初老の変態がいて「いや変態と違うわい」割り込まんでください。

「こんな部屋に暮らしてる時点で変態だと思うよ」

「ここで暮らしてる訳ではないんだが、まあ良いわいおぬしは死んだそれはわかるか？」

「うんうん、わかるよ見事におつ死んじやつたよね、ハハハハ」

陽気に笑い出して老人を見つめると、いつしゅん彼の顔が呆ける。

「普通死んだらそんな風には言えんぞ。」

「人はいつか死ぬんだよ、誰でも知ってる事だよ神様」

「なぞなぜ分かるかって？ 簡単だよ僕は死んだ事覚えてるもん、刃物でブスリすごかったよ痛いんだねあれって。それで死んだら人っぽくない気配のにこんなところで会う、もう神決定じゃん」

「そうかなるほどよく頭の回る奴め、だが二度とわしの言葉を遮るな」

「は〜い」

神は何やら考えた素振りを見せ懐から書類を出した、横から覗いても何も書いてない白紙の束だが。

「坂上潤 男 17歳死因はかねてより精神的に追い詰めていた同級生による刺殺か酷いのう」

「ほんとだよね〜。笑っちゃうよね、僕はただ見つめてたり本当のことを言っていただけなのにさあ〜」

本当のところ同級生に喧嘩を売られて殴られても何をされても笑顔で話しかけ、そいつが気にしていることを言って精神攻撃をして家庭崩壊にまで追いやってただけなんだからどね〜。

「どう考えてもお主がやりすぎだと思うがの。人間触れられたくないことの一つや二つあるじゃろう？ 何かしら突っ込みすぎたんじゃよ」

「あは♪妄想が達人なんだね神様。そうゆうのは平和ボケした人間にはくだらないこと
しかないんだよ」

「シバくぞ貴様、まあ良いわお主には転生して貰うぞ意義は認めん」

いきなり神はその場で少し頭を下げはじめちゃったよ。いきなりだ〜いわけがわか
らないよ。

「実は先日世界神様懇親会にて一発芸として何人か消してしまつてのう。代わりの人生
と言つてはなんじゃが転生させることにしたんじゃ」

「はあ〜?」

それがホントなら神様つてろくでもないねどうでもいいけどね。他にも何人かい
るのかあ〜それだけがめんどくさ〜い、まあ世の中なんて不条理だから面白いんだけど
ね。

「逝くのはハイスクールDxDの世界じゃな、一樣おぬしには力を三つ渡す選ぶがよい」
「テンプレ乙、ところでハイスクールDxDつてどんな世界? ハイスクールだから高校
ラブコメ?」

「いや悪魔、天使と堕天使が戦う世界じゃな。あとその世界の神がつくつた神器なるも
のを宿した人間やドラゴンもいるのう」

「ハハハ、何それ学園要素なくない」

とはいえこれは重要な選択を迫られているわけだからなく、悪魔や天使の戦いなんて街の一つは軽く消すだろう。ならば強い力をもらわないといけないね。でも僕は漫画とか詳しくないからどうしようかな、とりあえず知ってる漫画で街を消せるのはディーグレの伯爵かな？ いいよね伯爵素敵でお茶目な敵。

「じゃあまずノアの一族の力が欲しいな」

「随分とチートな力だな、まあ良いわい。他はどうするんじや」

どうしようあまり思いつかないな、取り合えずなかなか死なないキャラで強いのにしたほうがいいもんね。そうだ最近見たアニメに好きなキャラで強いのがいたんだ。

「じゃあキルラキルの高次縫製師《グランクチュリエ》がいいな。できれば原初生命繊維も欲しいな、いいでしょ」

「またもやチートか、チョイスがイカレてるとしか思えんな。原初生命繊維の方は少し仕様を変えるぞよいな。仕様は内緒じゃそのほうがいいじやろ？」

「うんうんうん、ありがとう素敵素敵たのしみだわく。あと武器が欲しいな何かいいのあるかな？」

「武器か、お主にぴたりと会うのはそうじやなソウルイーターのラグナロクなんぞどうだ？」

ラグナロクかくあの叫ぶ黒い剣かなかないいいチョイスじゃん素敵♪

「素敵素敵♪大好きさすが神様だね、じゃあちゃんと男として転生させてね。容姿はあなたに任せるね、いや〜楽しみだな悪魔に天使どんなのだろうな」

「まあそれぐらいなら良いじゃろうサービスじゃ。それでは二度目の人生楽しんでこい」

一瞬の浮遊感とともに足場が無くなる、そして落ちていく。

「ぱいぱい〜」

転生の仕方までこれって素敵こんな体験なかなかできないよ。

原作前

友達と力の襲来

こんにちわ皆さん僕は潤・N・針目だよ。名前の通りさっきのノアの転生者だよ、ちゃんと三つ特典選んだのにノアの力しか持っていないんだよ。ひどくない？でも伯爵だけじゃなくって一族全部ってのは僕も想定外のはっぴーだったよ。

「おい潤早く来いよっ！時間がもつたいないだろ！」

「そよ潤ちゃんせつかくのピクニックだよっ」

ああそくだ僕は今ピクニックにきてるんだった。今僕は5歳で両親はいないんだ、今は最近友達になった兵藤一誠君と紫藤イリナちゃんだよ。イリナちゃんはいいい子なんだけどイツセー君はちよつと残念な子なんだ、だつておっぱいの事ばかり考えてるし僕とイリナちゃんの性別を勘違いしてるんだもん。そりや僕も最初はびっくりだったよ鏡で見たら僕まんま針目縫なんでもん、まあちゃんといつてたから男だけど。

「あんまり親から離れたら危ないよ〜」

「任せる俺が守つてやるぜっ」

「きやくイツセー君カツコイイ」

典型的なフラグだよそれ、まあ僕からすれば何の問題ないけどねダークマター暗黒物質で作った改良AKUMAが何体かいるもんね。今はレベル3が2体だけど大量の魔力で作ってあとは他生物の魔力と生命力を喰って吸収してレベルアップいっぱい作って戦わせればどんどん強くなるぞ〜共食いさせればもつとも〜つと強くなるのさすごい。

「なっなんだあれ・・・」

イツセー君が空を見上げてる。上を向いたら真つ赤な巨大物が降ってきている。

あれ〜？あれつてももしかしなくても原初生命繊維じゃね？うわーいこんな方法でくれるのかあ、これでやつと生命繊維で服とカバーズって怪物が作れるよやったね。

「うわあああああつ」

「きやあああああつ」

「うわーい」

猛スピードで突っ込んできた原初生命繊維が僕にあたって鳩尾あたりから一気に体に入り込んできたからびっくりだよ。二人は気絶したみたいだね。しばらく寝てなよお子様たち僕もそのほうが楽だしね。

ズクンツ

「?」

体内の生命繊維が体の中を這うように広がるズルリズルリ手先まで足先まで頭先ま

よっ！でもダメっダメダメダメダメダメダメなんだからああ僕の新しい力これが生命繊維のチカラ僕に従えあつハハハハこれは少しおかしくなるのもわかるよ素敵っ」

でも少し眠いや・・・よし寝ようみんな寝てるし後でふたりの親が来てくれるねつおやすみ

その後様子を見到来た二人の親が見つ付けてくれて車に乗せられていたよ。

「なああれはなんだつたんだろうな」

「？なんのこと、疲れすぎて何か夢でもみたの？」

帰りの車の中で目が覚めたイツセー君は僕に聞いてきたけどとりあえずごまかしていた。一般人は知らないほうがいいもんね、何となく彼は人っぽくないけどね。

二人と別れたあとは家に帰つてご飯を食べる。

よしじゃあ服を作りに行きますかね吸収した時に頭に入ってきた方法で自分の中の空間に入つていく

と大きな空間に原初生命繊維がある。

「うわー綺麗な繊維離れてる僕にもすごい力が伝わってくるよ。早速作ろつかな改良型カバーズ」

僕があれば手を差し伸べると糸が伸びてきて手に触れてきて指先の絡みついてくる、

アニメで見たカバーズをイメージしながら糸を紡いでいくと想像どうりの服が出来た。「これを覚えてね、暇な時はじゃんじゃん作っちゃって一度作ってあげたんだから同じクオリティーで量産してねたまに新しいのとか変わったの作りに来るよ。とりあえず今日は一緒に寝よっか」

そう言うところの子は僕をすくい上げて塊の中にいれてくれた。

あれ？作文と思っただけでもう寝るよおやすみ

魔剣と初戦闘

こんにちワ♥皆さん 吾輩潤です♥ えっ？口調がおかしいって？それはしようがありません♥今吾輩は伯爵の格好をしているのですかラ♥気分は大事なんでス♥

原初生命繊維をこの身に宿してから早2年も経ちました♥ その間起きたことといえどオーフィスというそれはもう可愛いドラゴンと会ったことぐらいですかネ♥彼女なんでも故郷をグレートレッドなる他のドラゴンに住処をとられてしまったようです、可哀相に。それでなんでも吾輩から変わった心配がするそうなので手伝ってもらえるか試したいなど言って襲いかかってきました♥ 原初生命繊維の力を使いなんとか勝てましたがドラゴンとの死闘なんて7歳児がすることじゃありませんどうやら彼女は満足して帰って行きましたが今でも時々遊びに来るんですよ♥完全に秘密をおおっぴろげにできる友達なんて素晴らしいです♥でも寂しさを知ってしまった吾輩はついにレロをつくってしまいました♥ですから吾輩もう寂しくありませんヨ♥

そういえば吾輩ノアの力を修行しました♥ まあ修行といってもノアのメモリーから学んだので実質使ってみただけなんですけどネ♥今吾輩が使えるのは夢、快樂、怒、絆ロードジョイド ライスラボンドム
ラストルデザインスワイズリーが少々それと色と欲と智の7つと伯爵の魔術的知識などなのです。まあ使いこなせ

てないものもありますがこれぞチートの極みですネ♥

「ノアたま〜一体何処に行くレロか？そろそろ教えて欲しいレロ」

「フッフ♥実は素敵な遺跡を見つけたのでス♥行けばいいことがあると吾輩の勘が囁くのです。せつかく方舟もできたことですし冥界探検なんて素敵だと思いませんか？」

「危ないレロ、絶対危ないレロよノアたま。魔獣に襲われるレロ」

「残念でしたレロ、もう着いてしまいましたヨ♥」

「レロオ〜!!」

遺跡の中は思ったより綺麗であり芸術を感じさせるデザインとなってます。これはなかなかいい物件ですネ少し掃除すればなかなかいい別荘にできそうです♥数時間中を散策したのですが特に変わっているところがありません。おかしいですね、ここに来た時に原初生命繊維を手に入れた時のような疼きがしたんですがネ♥

「ノアたま〜やつぱりここには何も無いレロ、早く帰るレロ」

「おかしいですネ♥確かにここから感じたのですがね」

「たまには勘違いもするレロよ、帰るレロっ痛」

レロもお茶目ですネしつかり前を見ないから銅像にぶつかるのです・・・おや？壁についてる銅像がかけましたよ。傘がぶつかったただけなのに脆いですネ♥　　もしやここが？

確信がある訳ではありませんがレロで一撃入れてみたらなんと下に降りる隠し階段があるではありませんか。

「フフフ♥さすがは吾輩のレロ、見事に見つけてくれましたネ♥」

階段を下りていくと祭壇のようなものがありそこには透明な容器に入っているどす黒い液体がはいってました。フフフフ♥やっと見つけました吾輩のラグナロクちゃん

「ノアたま、何レロかあれ？なんかヤバイ匂いがプンプンするレロ」

「あれぞ吾輩が探し求めていた魔剣ラグナロク、黒血と呼ばれる人を狂わせる血でできた魔剣です♥」

「気色悪いレロ、あれをどうするレロ？」

「もちろんこうするのですヨ♥」

吾輩一気に飲み干しちゃいました。レロが横で騒いでますけど無視です。ああ、黒血が体に馴染んできますネ♥もうひとりお友達ができたわけですね、素敵です♥そんなことを考えていたら背中がむず痒くなってしまいました、そうですねではご対面といきましょう。

ピギャアアアアアアアア

ウフフ♥素敵な悲鳴ですね。一般人が聞いたら思わず耳を塞ぐでしょう♥

背中から出てきた黒血が人型に変わってきましたね。

「レッツレローノアたま〜大丈夫レロかつ、何か血がすごいことになってるレロ」

「大丈夫ですよ♥レロこれは魔剣を使うために必要なことでス♥そしてはじめましてラグナロクこれから吾輩の剣として仲良くしましょウ♥」

「ハッ何がよろしくだよ、馴れ馴れしくしやがって俺が素直に言うこと聞くと思ったら大間違いだぜ」

「レロ〜無礼レロ剣のくせに生意気レロ」

「ウフフ♥あなたも傘じゃありませんカ♥まあいいですラグナロクあなたと仲良くするためにティーパーティーを催したのでス♥アメやケーキを食べながらおしゃべりしましょウ」

「なにっ！何個だ？じゃ無え変装して姿隠してる奴に協力する気はねーよ」

「気づきましたか。変装とは装いを変えする事いわばファッションなのでス♥気分によって服を着替えるのと一緒です。他意はありませんヨ♥それとパーティーは金づるさえ見つければ毎日でもしますよ」

「マジか！しよーがねー一緒に戦ってやるよ」

おおくさすがは魔剣理解が素早くて助かります。これからは手札がさらに増えなすネ♥早く試してみたいですね・・・おやおやおや遠くの方で魔力の波動を感じますネ♥素敵ですねこれはあの神が用意してくれたチュートリアルですね。乱入しちゃいま

しよウ♥

「ラグナロク」

「おう行くのか？」

「おや？ 気づいてましたか」

「あたぼーよ。魂の波動がピンピン来るぜ」

「フフフ♥それでは行きますか」

遺跡を出て森の中をまっすぐ移動していると二人のお嬢ちゃんをおっさん達が8人ばかりで襲ってますネ♥これはいけません助けましょウ♥

なんてことを考えていたらこちらに気づきましたネ♥随分驚いてますねまあ歯茎丸出しの笑顔な紳士ですからね焦る気持ちもわかります♥こちらから話しかけてあげますか。

「皆さんご機嫌よう。こんな森の中でいたいけな少女二人のいたずらなんていい趣味してますネ♥」

「なんだ貴様はっ!! 部外者が邪魔をするな」

「ウフフ♥ダメですとりあえずその子達助けますお話はそのあとでス♥」

「このっ」

男の一人が魔力を放ってきました。でも無駄ですよそんなもの触りたくありません

ので。放たれた魔力はしつかりと身体を通り抜けました、快楽は正常に作動してますね
♥ 男たちも焦ってます全員で魔力を放ってきましたよ無駄ですけどね。

「無駄ですよ無駄無駄♥」

「ハアアアアアア」

ガキンツ

後ろから切りつけてきましたがレロで防ぎます

「レロオ〜痛いレロ」

「何ツ？」

「不意打ちなのに叫んじやダメです♥少し早いからって慢心はいけませんね」

「くらえっ」

「ですから無駄だと言ってm!!」

もう一人が槍で突いてきたのですり抜けようとしたら突き刺さりましたヨ♥

おかしいですね

「ウフフフ♥なんですかその槍は？興味深いですね」

「ツ!!化け物めっ」

引き抜かれたそばから生命繊維の力で傷が治ったので化け物扱い酷い事です♥

しかしあの槍は何でしょう？快楽が聞きませんでしたノアの力を無効化したので

しょうか？イノセンスに近いものですかね？そういうえば神器なる神が創った物がある
ようでしたね、それでしようかカマをかけますか。

「神器・・・ですネそれハ♥面白いですね」

「そうだともこれはあらゆるものを貫く神器ッその名もk」

「名は不要です。知っていたところで結果は変わりませんのデ♥」

「ほざけっ」

彼らは左右に分かれて魔力を放ち剣士達が隙をついて斬りかかってきました、まあ隙
なんてないのですが。

「ラグナロク」

背中から黒血が背中から竜のように溢れ出してくる。

ピギヤアアアアアアアアア

悲鳴とともに背中から現れた竜に驚き動きを止めましたネ♥おバカさん達 まあ驚
くのも無理はありませんよね黒く毒々しい液体のようなものが竜になって現れたらビ
ビりますよね。

「ラグナロク、悲鳴共鳴」

背中の竜が手元に集まり剣になる

ピギヤアアアアアアアアア

「ア、アアアアアアア」

「スクリーチα」

黒い狂気の塊が叫び声をあげるように敵襲い掛かると三人を飲み込んだ。

あれじゃ悲鳴を上げる隙もありませんネ♥

「このオ」

仲間がやられたからって逆上して襲いかかって来ちゃいけません。

「ちょいごいナ」

レロに魔力集めて放ちます。膨大な魔力で辺り一帯ごと消し飛ばしてしまいましたけどいいですよネ♥

ああちゃんと小娘二人は結界を貼って守りましたヨ♥どうやら気を失ったみたいですが猫だったのですね耳が生えてます獣人ですかネ♥

おや槍の彼が満身創痕とはいえ生きてますねびっくりです。

「グツクそつ」

「フフフ♥その神器すごいですね咄嗟に前に出して防ぎましたね。ウフフフ♥では生き残ったあなたには絶望をプレゼントです♥」

槍を拾い上げイノセンスを壊す要領で破壊する。えっ?なんで破壊の仕方を知ってるかって?ノアのメモリーをみたからです。やはり神器Ⅱイノセンスで問題ないみた

いすね♥彼目の前で槍が破壊されて絶望しきった顔しちゃってます。可哀想なので終わらせてあげますカ♥彼の体に手をいれてしんぞうをにぎります。ウフフ♥震えちゃってますね。

「そんなに怖がらなくてもいいですよ♥じっくり死を味わってください。ティーズ、お食べなさい」

ドクロに蝶の羽を生やしたゴーレムに心臓を食わせてやると痙攣しだして死んでしまいましたヨ♥なかなか素敵な殺し方ですね今度は心臓を抜き取って殺つちやいましょうカ♥

早く猫ちゃんたち起きませんかネ♥